浅見眼科手術クリニック

信頼の×主治医

院長 **浅見　哲**

目の前の患者さんを少しでも失明の危機から救いたい、少しでも光を残してあげたい

ハイブリッド手術で複数の眼疾患にも一度に対応

関連病院からも頼られる眼科手術のスペシャリスト

浅見眼科手術クリニックは愛知県大府市にある眼科手術を専門とするクリニックだ。「先進と、頼もしさと、ぬくもりと」をコンセプトに、高度な眼科手術を日々行っている。開院が2021年7月とまだ新しいクリニックだが、開院してから1年間の手術件数は1130件と非常に多い。「目の前の患者さんを少しでも失明の危機から救いたい、少しでも光を残してあげたい」「来院する患者さんも、このクリニックで働くスタッフも、笑顔になれる場所でありたい」と、語るのは同クリニック院長浅見哲医師だ。

浅見院長に日々の取り組みと、開院してからのお話を伺った。

様々な診療科に興味があった医学部生時代

患者の喜びがわかりやすいことを魅力に感じた眼科へ

浅見院長が医師を志したのは歯科医をしていた父親の影響だという。

「父は矯正歯科の専門医で、私が小学生のころ名古屋で開業しました。父の仕事場を訪れることも多かった私にとって、医療関係に携わるというのはなんとなく当たり前のような気がしていました」

幼いころから医学の道を意識していたという浅見院長は、その後三重大学の医学部に進む。しかし、学生だった当時は眼科医には興味がなかったという。「研修医のころに様々な診療科で経験を積むことができたのですが、その時から眼科の診療を面白いと感じるようになりました」

「目から得られる外界の情報は、五感から得られる情報全体の8割を占めています。だからこそ、患者さんは治療を受けた後、視力の回復をはっきりと感じることができ、とても喜ばれます。眼科では診断から治療、回復へ向かうという流れがとてもわかりやすい。患者さんの喜びがどの診

療科よりも医師としての喜びに直結しているのが魅力だと思いました」

数々の難症例の手術を手がけてきた勤務医時代

関連病院から頼られる存在に

1996年に三重大学医学部を卒業した浅見院長は、年間約1400件の眼科手術に取り組んできたという。院長が眼科部長として勤務していた豊橋市民病院での経験として、

「その頃から手術ばかりやっていました。午前は外来で診察していましたが、午後はすべて手術で、深夜までやることもよくありました。他の科の先生方からは、『また眼科が最後まで手術やっている』と言われていました（笑）」

また、医局長を務めていた名古屋大学医学部附属病院では、眼球破裂の手術を手がけることが多かったという。眼球破裂は事故やスポーツ、殴打などで眼球に外部から強い衝撃が浴びせられることが原因で起こり、眼外傷の中でも最重症である。早急な処置が必要とされ、手術の難易度も非常に高い。

「眼球破裂の手術は、もはや専門と言っても過言ではなかったほどです。夜中に手術で呼び出されることも多々ありました」

当時、浅見院長のもとには、県内外の関連病院から多数の患者が送られてきていたという。多くは眼球破裂や網膜剥離、眼内炎といった、失明の恐れのため緊急の手術が必要な患者たちだった。浅見眼科手術クリニックを開院してからも、患者の多くは他院からの紹介、またはセカンドオピニオンであるというから、浅見院長の技術力がどれほど高度なものであるかがよくわかると

同時に、他の眼科医たちから大きな信頼を得てきたことが伺える。

患者のメリットをとことん追求する「5つの約束」

不安を抱えた患者に安心して手術を受けてもらうために

高解像度で眼の負担も少ない3次元映像システムを導入

浅見眼科手術クリニックでは、患者に対して「5つの約束」を掲げている。「1、複数の眼の病気があっても当院でほとんど対応」、「2、難しい眼の手術にも対応」、「3、3次元映像システムを導入」、「4、痛みのない楽な手術」、「5、納得していただける説明」である。

「1、複数の眼の病気があっても当院でほとんど対応」は、浅見院長がハイブリッド手術と呼んでいる、異なる術式を組み合わせた手術を行う。

「患者さんが患っている眼の病気は1つだけとは限らないのです。例えば網膜硝子体の病気と重症の緑内障を同時に患っている血管新生緑内障という病気があります。普通はいったん網膜硝子体の手術をし、回復を待って緑内障の手術をします。しかし、これでは回復を待っている間に緑内障が進行してしまい、手遅れになることもあります。患者さんにとってはデメリットでしかありません

から、多少時間はかかりますが一度の手術でアーメドバルブというデバイスを使って治療するようにしているのです」

複数の眼の病気に一度の手術で対応するハイブリッド手術には、非常に高度な技術が要求されるが、浅見院長の手技でそれを可能にしているのである。

「2、難しい眼の手術にも対応」については、勤務医時代から難症例の手術を数々行ってきた浅見院長の経験を活かして、難易度の高い手術を手がけていることだ。糖尿病網膜症や網膜剥離、緑内障、白内障などいずれも重症化した症例も手術を行っている。

浅見眼科手術クリニック開院の2021年7月から1年間の手術件数は1130件であるが、そのうちの215件は緑内障の手術である。緑内障は日本人の中途失明原因の第一位だが、その手術は術後の感染症のリスクや要求される技術も高く、一般の眼科クリニックでは手術を行わない場合もある。さらには眼圧の低下効果が期待したほど得られないという場合もままあるため、躊躇する眼科医も多いが、浅見院長は積極的に緑内障の手術も行っている。

「3、3次元映像システムを導入」は、従来の手術用顕微鏡よりも解像度の高い立体映像を映し出すことができる最新システムの導入だ。また、眼の組織に対して強い光を当てる必要があった従来の顕微鏡に比べ、弱い光でもはっきりと見えるため、眼の組織への光のダメージを半減させることも可能である。

眼は繊細なことに加え、細かい血管や神経も多い精巧な臓器であるため、手術では非常に精密な手技が求められる。それゆえ手術の成功率を上げる、よりクリアな映像が必要なのだ。

「手術を中心に行うクリニックですから、医療機器にはこだわるようにしています。やはり最新設備の方が患者さんの安心にもつながりますから」と浅見院長。

「4、痛みのない楽な手術」は、痛いというイメージがどうしても付きまとう眼科手術において、患者が特に求めていることだ。ほとんどの眼科手術では眼に局所麻酔を施して行うため、患者の

「先進と、頼もしさと、ぬくもりと」をコンセプトにした眼科手術専門のクリニック

意識は手術中にもはっきりとしており、施術している医師ともコミュニケーションをとることができる。浅見院長は、患者に痛みがないか確認し、痛みがある場合には麻酔を追加して、できるだけ無痛の手術を行うように心がけている。

「患者さんの中には手術中に痛みがあっても、このくらいの痛みは我慢しなければと思って我慢する方もいます。痛みを我慢すると血圧が上がり、眼にもぐっと力が入ってしまい、眼の血管から出血することもあります」

眼から出血することで合併症につながる場合もあるため、痛みのない手術というのは患者の身体と精神双方に重要なのだ。

「5、納得していただける説明」について、「自分の症状を理解されないまま帰られるのは、自分にとっても、患者さんにとっても、よくありませんから」と浅見院長は語る。浅見眼科手術クリニックで行っている手術は、ハイブリッド手術をはじめ高度なものが多く、患者として来院した基礎知識

がある他の診療科のドクターでさえも理解するのには時間を要するという。ましてや、一般の患者となると理解には相当な努力を要するのだが、浅見院長は手術に関わることはできるだけわかりやすく患者に説明するよう心がけている。

「5つの約束」には、浅見院長の患者第一の考え方が反映されているのである。

若手の眼科医から度々寄せられる手術見学希望

浅見院長の手技へのゆるぎない信頼

卓越した手術手技をもつ浅見院長のもとには、浅見眼科手術クリニックを開院後も、手術の見学を申し出る眼科医が訪れるという。「見学の申し出は極力受け入れるようにしています。実際に手術をやってもらうことはないですが、手術後にポイントの解説をします。眼科医や若手の勤務医のほか、自身のクリニックを経営している眼科医からも見学させてほしいという申し出が度々ありました」

また、浅見院長は勤務医時代から国内外の学会で様々な発表を行い、眼科手術の様子を収めた教材ビデオで複数の賞を受賞している。第3回ophthalmic surgery film award 2008では、「豚眼による白内障手術教育」のタイトルでGold awardを受賞している。豚の眼球を用いて白内障手術の手順や要領を解説する内容で、当時は若手の医師が参考にするのによい映像が無かったのだという。2012年の第35回日本眼科手術学会総会では、「内境界膜剥離術」のタイトルでSilver Awardを受賞。内境界膜剥離術は黄斑部網膜疾患の手術において必須のテクニックであるのだが、若手の眼科医が習得するには

根気と反復練習が必要であるため、浅見院長はわかりやすい説明を加えたビデオを作ったのだ。

「勤務医だったころは後進を育てるのも仕事の一つでした」と浅見院長。彼の技術へ寄せられる他の眼科医からの信頼は、独立後も変わらず色褪せない。

スタッフの総力があって成り立つ「先進と、頼もしさと、ぬくもりと」

「患者さんもスタッフもここに来る人がみんなハッピーになれるクリニックでありたい」

「先進と、頼もしさと、ぬくもりと」は浅見眼科手術クリニックのコンセプトである。「先進」は患者の安心へとつながる最新設備の導入であり、「頼もしさ」は浅見院長の確かな手術手技である。「スタッフはみんな当クリニックのコンセプトを理解してくれています。そして、『ぬくもり』を生み出せるよう最大限の努力をしてくれています」

「我々は日々多くの患者さんに手術を行いますが、多くの患者さんにとって手術は一生に何度も経験するものではないですから、どうしても不安ですし、中には相当な覚悟を決めて来られる方もいます。スタッフたちは患者さんがリラックスできる環境をつくり出せるよう、患者さんにとって最良の対応をしてくれているんです」スタッフが患者の声にできるだけ耳を傾け、しっかりとコミュニケーションを取り合う。時には互いに冗談などを言い合うことで、クリニック内のあちこちから笑いが生まれる環境ができたのである。「またここに来たいと言っていただける患者さんもいますし、たまに手術が終わって帰れる状態になっても、居心地が良くなってなかなか帰ってくれない患者さんもいます。(笑)それは困りますがスタッフのおかげで本当にリラックスできるクリニックになっているんだと思います」と、浅見院長は笑顔を浮かべながら誇らしげに語っ

リラックスできるよう、患者とのコミュニケーションをしっかり取るようにしている

た。

「今後はクリニックのさらなるスキルアップを目指して、土台作りに励んでいきたいと思います。三方よしのクリニックにしていきたいと考えています」

「三方よし」という言葉は現在の滋賀県である近江国出身の商人が用いた言葉である。三方は売り手、買い手、社会の3つを指しており、売り手は自分の利益だけを追求せずに買い手に喜ばれる商品を提供し、得られた利益を社会のために使っていくという考え方だ。

「患者さんにとってはぬくもりのあるクリニックを、スタッフにとっては働いている間も笑顔になれて、心に余裕ができるクリニックをつくれるように心がけています。患者さんとスタッフ双方がハッピーになれる好循環をつくり出し、その輪を広げて現代の高齢社会には眼科手術で貢献していく。そんなクリニックでありたいのです」最新設備と、浅見院長の高度な技術と、スタッフのぬくもりと、この3つが一体となって浅見眼科手術クリニックは今日も歩み続けていく。

浅見眼科手術クリニック

PROFILE

浅見　哲（あさみ・てつ）

名古屋市出身。
平成８年、三重大学医学部を卒業。
平成10年、名古屋大学医学部眼科学教室に入局。
平成11年、国立名古屋病院（現名古屋医療センター）に勤務。
平成16年、名古屋大学医学部大学院修了。
名古屋大学医学部附属病院に勤務。
平成19年、豊橋市民病院に勤務。
平成21年、米国ミシガン州 William Beaumont hospital / Oakland University　リサーチフェロー。
平成23年、総合病院南生協病院に勤務。
平成24年、名古屋大学医学部附属病院に勤務。
平成28年、眼科三宅病院に勤務。
令和３年、浅見眼科手術クリニックを開院。

INFORMATION

所在地　〒474-0073
愛知県大府市東新町2-165
TEL　0562-46-7700

アクセス　JR東海道線「共和駅」東口徒歩１分

設立　令和３年

診療科目　眼科

診療時間　〈月・水・木・金・土〉9：00 ～ 12：00
〈火〉9：00 ～ 12：00、16：00 ～ 17：30
手術　〈月・水・金〉13：30 ～ 17：30
〈火〉13：30 ～ 15：30
〈休診日〉日・祝日・第１土曜日・第３木曜日

理念　「先進と、頼もしさと、ぬくもりと」

https://asamiganka.com